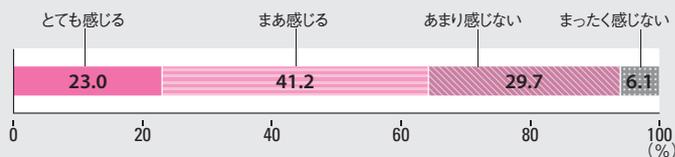


# 新課程がもたらす 学力差の広がりに どう対応すべきか

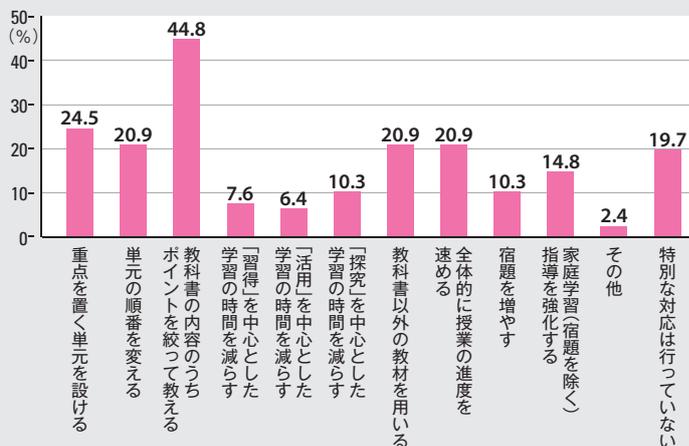
Benesse教育研究開発センターの調査によると、高校に先駆けて新課程が全面実施となった中学校では、多くの教師が新課程の実施によって生徒の学力差の広がりを感じている。中学校までの学習内容の積み残しが増えると考えられる高校では、どのように対応しようとしているのか。岩手県立盛岡北高校の取り組みを紹介する。

図1 新課程全面実施後の変化（中学校）

Q. 新課程全面実施後、昨年度(2011年度)と比べて、生徒間の学力差による授業のやりにくさを感じますか



Q. 新課程全面実施後、授業を計画通りに進めるために、現在行っている対応はありますか(複数回答)



\* 調査対象は中学校教員361人(有効回答数330人)、WEBにて実施  
出典/Benesse教育研究開発センター「中学新課程影響に関する調査」(2012年6月)

中学校教師の多くが  
学力差の広がりを感じている

ベネッセ教育研究開発センターの調査によると、2012年度から新課程が全面実施された中学校では、6割以上の教師が、以前に比べて、生徒の学力差により授業をやりにくいと感じているようだと(図1)。また、増加した学習内容を計画通りに進めるために、「教科

書の内容のうちポイントを絞って教える」「重点を置く単元を設ける」などの対応を取る教師が多かった(図1)。こうした生徒の変化と中学校での指導の変化を踏まえ、高校では入学段階での丁寧な生徒把握に基づいた指導がより求められているが、そうした取り組みを行っている岩手県立盛岡北高校の事例を次ページから紹介する。

岩手県立盛岡北高校

# 1年次に模試と意識調査を継続して行い 生徒個々の課題を早めに把握して対応

## 入学直後のオリエン合宿で 高校生としての二歩を踏み出す

中学校の新課程は2009年度から数学と理科が先行実施され、その中で3年間学習してきた生徒が、12年度に高校1年生となった。これまでの1年生とどのような違いがあるのか。進路指導課の小田島淑人先生は次のように指摘する。

「今までに比べて数学の学力が高くなったと感じる一方で、国語や英語の力には不安があります。特に、読解問題や記述問題が苦手なようです」

生徒の学力差について、進路指

導主事の千葉貢先生は次のような懸念を話す。

「全ての教科を新課程で学んだ生徒が入学してくれば、学力差は更に広がると予測しています。学習量の増加などにより、中学校で授業に付いていけなくなる生徒が増え、その結果、学力の二極化が進み、中位層が少なくなるような状況が強まるかもしれません」

このような変化に対し、同校は、生徒が教師に傾倒できる相互関係を意味する「師弟和熟」の教育目標に則り、生徒と教師が近い距離を保ち、一人ひとりを手厚く支える指導で対応する考えだ。

まず、高校に早くなじみ、安定

した生活が送れるよう、入学式の翌日から1泊2日のオリエンテーション合宿を実施する。テーマは「仲間づくり」。教科学習ではなく、人間関係の構築を目的とした共同作業を行う。

「全ての生徒が高校生活の最初の一歩をうまく踏み出せるようにするのが狙いです」（千葉先生）

近年、広い地域から志願者が増え、1つの中学校からの入学生が数人ということもあり、生徒が学校になかなかなじみず、不登校につながることもあった。合宿を始めてからは、生徒同士が打ち解けるまでの時間が早くなり、不登校者は大幅に減ったという。



岩手県立盛岡北高校  
千葉貢  
ちば・みつぐ  
教職歴28年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。



岩手県立盛岡北高校  
高橋直文  
たかはし・なおふみ  
教職歴26年。同校に赴任して3年目。進路指導課、2学年主任。



岩手県立盛岡北高校  
小田島淑人  
おだしま・よしと  
教職歴22年。同校に赴任して4年目。進路指導課、1学年主任。



岩手県立盛岡北高校  
梨子田 喬  
なした・たかし  
教職歴10年。同校に赴任して6年目。進路指導課、2学年担任。

### 岩手県立盛岡北高校

◎教育目標は、「生徒と教師がともに学び、共に切磋琢磨する『師弟和熟』の精神で、勉学に励み、心身を鍛える『青春道場』」。

◎全日制／普通科／共学 ◎1学年約240人

◎2012年度入試の合格実績（現浪計）／国立大は、北海道教育大、弘前大、岩手大、東北大、山形大などに139人が合格。私立大は、盛岡大、東北学院大、東北福祉大、東北工業大、学習院大、日本大、明治学院大などに延べ168人が合格。

### 意識調査で生徒の内面にも迫り 課題には素早く対応

同校が生徒一人ひとりを丁寧に指導するために活用するのは、1

図2 「スタディーサポート検討会」の資料（抜粋）

氏名	校内順位			1年7月模試 (偏差値)				スタサポ 1-2学力(GTZ)				国語の学習 上の悩み	数学の学習 上の悩み	英語の学習 上の悩み	平日の 学習時間	休日の 学習時間	部活動と学 習の両立	現在の気持ち や状況	高校生活 の振り返り (10点満 点)	文理選択に ついての決 定状況	文理選択を決 める上で重視したい こと
	55 11	1年7 月	55 12	国語	英	数	理	国語 英GTZ	国	数	英										
	4	156	99	47.5	51.9	50	42.7	B2	C2	B3	A3	学習の方法が わからない	今のところ悩 みはない	今のところ悩 みはない	ほとんど しない	ほとんど しない	部活動で疲 れ、自宅での 学習に集中で きない	頑張って今 の成績を伸ば したい	5点	理系に決定	学びたい学 科や職業に 近づける方 を選びたい
	236	231	236	41.3	40.4	47.1	38.8	D2	C1	D2	D2	計画を実行 できない、ま たは長続き しない	計画を実行 できない、ま たは長続き しない	計画を実行 できない、ま たは長続き しない	1時間	3時間	部活動で疲 れ、自宅での 学習に集中で きない	勉強しな い、しかた なく勉強し ている	6点	考えている が決定でき ていない	思い通りの 方向に進め る方を選び たい
	41	7	225	58	63.5	60.4	40.4	C2	C1	C1	C4	学習に集中 できない	学習に集中 できない	学習に集中 できない	ほとんど しない	1時間	部活動で疲 れ、自宅での 学習に集中で きない	勉強が興味 を失い、思 え、する気 持になれな い	6点	文系に一 定している が迷っている	思い通りの 方向に進め る方を選び たい
	174	182	180	45.8	45.8	45.1	49.4	B3	B3	B2	C2	学習の方法が わからない	授業の進め 方、わからない	英語の聞き 取り、わからない	30分	3時間	部活動で疲 れ、自宅での 学習に集中で きない	勉強はあ り、にわか にやる	5点	理系に一 定している	学びたい学 科や職業に 近づける方 を選びたい

黒色が要注意、灰色は注意を意味する内容。

\*学校資料を、項目を抜粋して掲載

年生で2回行うスタディーサポートだ。1年生4月の実施分では、進路希望や保護者との関係など、進路・生活面を主に確認し、その資料を使って5月の連休明けに二者面談を行う。次に、「1年間で学習意欲や学習時間が最も下がりやすい時期」（千葉先生）である9月に実施し、生徒の変化を追う。10月には学年団と進路指導課で「スタディーサポート検討会」を開く。用いる資料はスタディーサポート2回分と進研模試の成績、設問の回答を表計算ソフトで一覧表にしたもので、成績が低い箇所と、「学習の方法が分からない」「授業の進度についていけない」など、課題のある箇所のセルに色を付ける（図2）。このような資料を作る理由を、進路指導課の高橋直文先生は次のように説明する。

「課題のある箇所に色を付けることで、生徒が抱えるさまざまな課題が一目瞭然になり、タイムリーに指導に生かれます。学力だけでなく、生徒の内面にまで迫れるのが、この資料の良いところです。色の数が多い生徒とはすぐに

面談をするようにしています」データは学年団で共有して話し合うため、教科担任から学級担任に、「この間の授業でこんなことがあった」といった情報もたらされることも多い。また、養護教諭も参加し、保健室での様子を伝えることもある。

「学級担任が課題のある生徒を1人で抱え込まないような体制にしています。学級担任だけで対応できない時には、学年主任を交えた面談をするなど、手厚く生徒を支えられます」（千葉先生）

生徒は、複数の教師に同じことを褒められたり、注意されたりすることに慣れる。それが「いつも先生たちに見守られている」という安心感につながっている。

「新課程の全面实施によって学力差が広がった場合、このような生徒の内面まで掘り下げた理解をした上での支援がますます重要になると考えています」（千葉先生）

### 下位層に手を掛けることが 中位層の引き上げにも有効

学習指導では、生徒個々の支援

に力を入れる。まず、家庭学習習慣の定着のために、1年次から毎日、家庭学習ノートを提出させ、担任がチェックしている。進路指導課の梨子田喬先生はこう話す。

「家庭学習は積み重ねが大事だ」という意識を持たせるために、学習時間も記入させ、学習量を把握できるようにしています。また、ノートには『学校に行きたくない』『部活を辞めたい』といった悩みを書く生徒もいます。担任が毎日見ること、事前に問題を防ぐ役割もあります」

学力層別の指導も始め、特に成績下位層の支援を重視する。

「下位層の生徒に接する上で大切なのは、『自分たちは手を掛けられている』と感じさせることです。教師に見放されていると思うと、生徒は学習から離れ、ひいてはクラス全体の学びに向かう姿勢が崩れてしまいます。下位層の頑張りを見ることで、少し上の層の生徒も刺激され、学習に向かうようになりやすくなります。そうして影響し合うことが、学校全体の底上げにつながります」（千葉先生）

下位層の指導では、予習・復習や週末課題の取り組み状況を教科担任が厳しくチェックし、未着手や未提出の生徒は放課後に残して取り組ませたり、再提出させたりしている。理解が遅れている生徒には、例えば英文を10回ずつ書かせてレポートを提出すれば合格というような、比較的簡単な内容を課すこともある。そうしたスモールステップを重ねるうちに次第に力が付くという。

上位層は授業に付いてこられる生徒が多いため、学習意欲が下がらないように心掛ける。

「面談などを通して『常に自分は見られている』という意識を持たせることが大切です。そのような学習意欲を高められれば、次第に上位に食い込んでこられる層でもあるからです」（千葉先生）

上位層には、志望大別の添削指導を行うなど、意識を更に高める指導に力を入れる。

「添削指導の開始時期は志望大の難易度に応じて変えています。難関大を目指す生徒は早い段階でグループ分けをし、添削指導を始

めます。同じ目標を持つ生徒が集まり指導を受けることによって仲間意識が強まり、長い受験勉強を精神的に持ちこたえられるようにするのが狙いです」（千葉先生）

### 上位層も下位層も学ぶ場のある協同学習

上位層・下位層共に有効な学習活動として力を入れるのが、少人数のグループ学習だ。現在は、2年生の英語と小論文で実施。3クラス合同で行う英語のタスク達成型グループ学習は、エッセーライティングや暗唱といったタスクに4人1組のグループで取り組む。上位層の生徒は他の生徒に説明することで理解が深まり、友だちに教えてもらった下位層の生徒は頑張ろうと意欲が高まる効果がある。

小論文は、以前は「総合的な学習の時間」に教師が指導していたが、後述のキャリア教育の充実によって、より限られた時間で指導する必要が生じたため、協同学習を取り入れることにした。まず、4人グループで話し合ってからプロットを決め、原稿は宿題として個々

に書いてくる。次の時間に各グループ1人の原稿を発表し、良い点や改善したい点を指摘し合う。「原稿は名前を伏せて発表して

いるため、生徒からは活発に意見が出てきます。教師から指導されるよりも、クラスメートから評価されたり指摘を受けたりする方が効果が大きいようです。化学反応が起きたかのように、生徒は一生懸命に小論文を学ぶようになりました」（梨子田先生）

今後は他の教科にも協同学習を広げていく方針だ。

「授業を活性化し、意欲を高める上でも協同学習のメリットは大きいと考えています」（高橋先生）

### 3年間のキャリア教育でモチベーションを維持

生徒の進路意欲を高めることも学力差の拡大を防ぐ対策の1つとして、09年度にキャリア教育を刷新、3年間の活動を体系化した。

1年生では主にキャリアガイドンスを行う。社会人講師の講演会と実習をセットとし、旅行会社の講師なら講演を聴いて旅行プラン

を作成、映像制作会社の講師なら学校のCMを制作というようにし、一歩踏み込んだ職業理解を促す。

2年生は学問研究に取り組み。大学教員を招き、計12の模擬講義を開講。学部・学科選択や3年生のコース選択を考えた上で志望理由書を書かせる。2月にいったん完成させ、3年生4月以降に何度も書き直させる。

「2年生3学期に志望理由書を書いて目的意識を持たせると、3年生進級に向けて意欲を高める効果があります。志望理由書をきちんと書けるほど意思が明確になれば、苦しい時期が訪れても投げ出さずに頑張れます。生徒は卒業式後も登校し、進路が決まるまで決して諦めません。前期日程が不合格でも全力を尽くせるからこそ、後期日程で毎年20人を超す合格者が出るのです」（小田島先生）

高校で新課程が全面实施となれば、中学校で広がった学力差が更に拡大する恐れもある。同校は師弟和熟の考え方を改めて見直し、生徒一人ひとりの学習と意欲を支える指導を強めていく考えだ。